

恋人はスナイパー < 偽りと隠された真実 >

作: ウッチャン大好きっ子

* < > で閉じられている会話は、中国語での会話になります。

新キャラ

今回は居りません。

解説

1. 四神・・・古代中国で信じられている東西南北の方位を守る4種の神獣である。

順に青竜(せいりゅう / チンロン)、白虎(びゃっこ / バイフー)、

朱雀(すじゃく / チューチュー)、玄武(げんぶ / シュエンウー)。

(/ の後に書いてあるのは中国読みです。)

姿は順に龍・虎・鳳凰・亀に蛇が巻き付いてもので示しており、季節も示してます。

(順に春・秋・夏・冬)

日本では、中国→朝鮮半島を経由して伝わり、

古代都市計画や建設に大きな影響を与えた。(例: 710年の平城京への遷都)

2. アーフィティシャル・・・”人工の”という意味です。

3. プロトタイプ・・・”試作品”という意味です。

～第44章～ < 白虎 >

凱歌は静かに全員に見える様に背を向けた。

「僕は・・・組織に入ってからすぐに背中に入れました・・・自分では見えないので

どうなっているのか分からないんですけど・・・。」と静かに言うと、上着を静かに脱いだ。

龍牙とプロフェッサーそしてきなこは妙に気になってしまった。”虫の知らせ”というか何かが三人にはあった。

そして、凱歌の背中が露わになった瞬間、全員がその美しさに息を呑んだ。

その背中には、三日月の夜、岩山に威風堂々と立つ孤高なる”白い虎”がこちらを睨んでいる美しい刺青が入っていた。

龍牙が一步後退りしてしまった。一言「”白虎”。」と呟く。そして目をそらし苦痛に顔を歪めた。

その龍牙の行動に、あまりの美しさに固まっていたプロフェッサーが気が付いた。

「どうした？どこか痛むのか？」とプロフェッサーは凱歌の”白虎”に驚きつつ、近寄りながら訊くと、

「”白虎”を見たら急に背中が熱くなってきたんだ。反応しているんだ・・・。」と静かに龍牙は答えつつしゃがみ込んだ。それを聞いたプロフェッサーは、愕然として立ち尽くした。

きなこは龍牙とプロフェッサーの行動が見えていなかった。ただ凱歌の背中に描かれている”白い虎”を見つめていた。

頭の中では、龍牙が説明していた言葉が渦を巻いてうごめいていた。

『四つ目はこれは不確定な部分があるのだが、ボスなど上層部の人間は体のどこかに美しい”刺青”

を施しているようだ。”という事はホイさんは一体何者なの？」と漠然とだが、きなこは考えていた。

様々な思いが交錯する中で、龍冴の体の異変が表面化し始めた。

徐々に龍冴の瞳は紅くなり始め、髪さえもが紅く染まり始めた。

あの”忌まわしい姿”になろうとしていた。

龍冴は「何なんだよ！勝手に変化するな！一体どうなってんだよ！？」と大声を上げ、立ち上がった。

その声に凱歌達が慌てて振り向くと、龍冴の体は完全に”禍悪主”の姿と化していた。

全員の視線が集まる中で、龍冴はビクとした後、さっきまでの慌てぶりが嘘の様に落ち付いていた。

「なるほど。この方が見せやすいというわけか。」と龍冴は静かに呟き、俯いていた顔を上げた。

静かに立ち上がり、全員の方に向き直した。そして何か言おうと口を開きかけた時だった

誰かがそれを遮った。

「勝手に自分の事は語るなよ。君の事は特例によって、君の口から語る事及び書類すら

持ち出し禁止なんだぞ。それが誰であっても。そう、血縁者でもあっても……。」

という声が上から響き渡った。

「なぜだ。ココに居る者は、全員知る権利があるはずだ。ましてや命の危険すらあっただぞ。」と

龍冴は言った。

「それは確かにそうだが、それ以上に君の情報は世界にとって非常に危険なのだ。違うかね？」と

再度問い掛けられ、龍冴は黙っていた。

「だが、報告したはずだ！凱歌にはそれを知る権利がある。

第一、ココに居れば外部に漏れる事もない。ましてやココに居る者でその技術を聴いて

利用出来るのは、俺とプロフェッサーだけだ。

俺は自分のあの力と奴について言いたいだけだ。多くは語らない。あんた等がそこで監視すれば

いいだろう？なァ、運難コンビ。」と龍冴は言った。溜息が聞こえてから上から声が聞こえてきた。

「確かにココに居れば情報は漏れる事はない。ましてや使えないし、語る必要もないか……。

君には負けるよ。我々の名の元で語る事を許可しよう。但し、ココに居る者に言う。これからいう事は

他言無用だ。それは特例なので犯せば、厳しい罰則が課せられる。心しておいてくれ。」と運難コンビ

は言った。

～第45章～＜龍冴の過去＞

「ありがとう。二人とも。それじゃ、俺がまずこんな姿になった理由から語ろう。」と龍冴は言う

上着を脱ぎ始めた。

その露わになった体は、白く透き通っているかの様だった。そして、右胸の下辺りには黒光りする

金属板のような物が胸筋のラインに沿って真ん中辺りまで続き、下には腹筋のラインまで達し、

脇腹近くまで続いている。かなり大きな物が付いていた。

二の腕が15cmほどの幅のリストバンドのような物が、両方に付いていた。

体には、あれだけの事があったというものに、怪我がなかった。しかし、その分目立つ傷があった。

それは、左の鎖骨の肩に半分ほど行った所に、丁度心臓の高さ辺りに銃痕があった。

それはかなり古いものの様だったが、その傷はかなりの近距離から撃たれた事を物語っていた。

そして龍冴はゆっくりと全員に見える様に背を向けた。

全員は、さっきの凱歌同様に、息を吞んでしまった。というよりも愕然としていた。そこには……。

雷鳴轟く雲海を荒れ狂う血に飢えた”青い龍”がこちらを睨みつつ泳ぐという刺青だった。

そして何よりも全員が愕然したのは、その構図の造り、タッチが凱歌の物とそっくりだった。
「俺も凱歌の”白虎”を見て驚いたよ…。まさか”四神”の図が描かれていると思ってみなかった。
しかも、同じ奴の作品とは思わなかった。

俺のは、”青龍”の図だ。凱歌、君のは”白虎”の図だ。中国では”青龍”はチンロン、
”白虎”はバイフーと呼ばれている。”青龍”は四神の内、破壊、つまり力を司っている。
”白虎”は四神で一撃必殺、つまり速さを司っている。」と龍牙は刺青について説明しながら
全員の方に向いた。その時全員が龍牙の胸の傷に目が行った。
「この胸の傷は、俺を止める為に青水が俺に銃を向けた時のものだ。あの時は最初で最後の暗殺者と
刑事として本気で戦った時だった。俺は青水を倒してターゲットの元に向かおうとした。
その時、俺の銃を手にして”私は貴方を止めるためなら、貴方を撃てる”と言ったが、
俺は全く信じていなかった。人間はそこまで強くないと思っていた。そのため俺は気にせずに
歩き出したが、すぐに先ほどまでとは違う殺気に気が付いて振り返って瞬間、アイツは覚悟した目で
俺に向かって引き金を引こうとしていた。

俺はそこで、”撃つなら一発でやれ。そうすれば俺に殺される奴は二度と出ない”と言った。
青水はなんというか頑固な部分があって、それを聞いた途端顔つきが変わり、本気で撃ちやがった。
でも、やっぱりアイツも人間だった…。アイツの腕なら確実に当てられたのに外した。

そのまま、アイツはしゃがみ込んで泣き出しやがった。それを見ている内に自分のして来た事の
大きさを理解し、これ以上、青水を悲しませたくない为本気で思った。そして、俺は野良になった。

でも、俺が青水の立場だったら、きっと俺も撃っていたと思う…。凱歌、きなこさん、
君達は出来るかい？愛する者を止める為に傷つける事が。」と問い掛けた。

二人は一瞬動揺したが、すぐに”出来る”と言わんばかりの視線を向けた。
それを見た龍牙は微笑んだ。

～第46章～ <特権>

「やっぱり君達は強いよ…。互いを信頼し、思い合っている。それが重要だ。もう1つ、もっと目立つ物
があると思うが、それはこの金属板だ。これがさっき俺が言っていた”自分に与えられた唯一の特権”
というものだ。これこそが運難コンビが漏れる事を恐れている”力”で、禍悪主が紅き死神と呼ばれる力
を持つ最大の理由だ。」と龍牙は言うと言射器を取り出し、それを金属板に付いている蓋のような物を
開け刺し込んだ。そして、ゆっくりと透明な液を抽出した。

「これが俺の髪と瞳が紅くなったり、荒っぽくなったりする原因で、俺の命と力の源である特殊物質、
その名を”レッドアイズ”という。今こそ透明な液だが、」と龍牙言いながらトレーに透明な液を移し、
そこに唾液を垂らした。

「見てみる。」と全員に見える様にトレーを傾けた。すると龍牙の唾液が落ちた所から段々と
真っ赤になっていた。

「コイツはどんな生き物でもいいが、その体液に触れると紅く変化し効果を発揮する。血はもちろん、
涙や細胞液でも変化する。

そしてコイツはある一定量を超えるとまず瞳に蓄積される。そのためすぐに瞳が紅くなる。
これが名前の由来になった。コイツは自然界には決して存在しない。人間が作り出した100%人工
物質であり、究極物質と言われているが、その反面、最悪物質とも呼ばれている。

その理由は、コイツを体内にたった1滴入れただけで、その生き物の持つ自己治癒力を平均5倍近く

まで高める事が出来る。しかし、世の中には都合のいい事ばかりという事はない・・・。

コイツには恐ろしい副作用がある。それは・・・。まずコイツには非常に強い依存性がある。

そして、第一段階として、体内に入れた生き物を、極限まで狂暴化させる。

まだこの状態だったら元に戻る事が出来るが、第二段階目になるとその生き物の理性・基本行動を失われ、欲望のままに動く”殺戮生物”に変える。

もうそうになってしまうと戻る事はなく、永久に”レッドアイズ”を欲し続ける。そして、死を与えるほかに助ける方法がない。」と龍牙は言い終えると溜息をついた。

「だが、どうしてこれほどの超力な物質が、世の中に出ていないのか。それはコイツがとても複雑な構造をしている事もあるが、最大の要因はあまりにも不安定であり、地球上では純度を高める事が出来ないからだ。さて...ここで俺のした行動の中で、おかしな点がいくつかあったと思う。

まず、今俺が見せた”レッドアイズ”はどこから出てきたか？

そして俺は髪が紅くなり瞳が紅くなった今でも、理性を保ち正常に喋っている点・・・。」と龍牙は言う続けるのを、ためらう様に上を見上げた。

「ここまできて、続きを言わない訳にはいかないだろう・・・。但し、慎重に言葉を選べよ。」と南原氏は言った。龍牙はその言葉を受けると溜息をつきながら、両手で顔を擦ってから全員の方に顔を向けた。その表情は今までに無く真剣であり、緊張と恐れを秘めていた。

～第47章～ <人の欲望の結晶>

「二つの疑問点に答えるには俺の誕生について知らなければならない。

あまり詳しくは説明できないが、一言で片付けるのは簡単だ。

しかし、それでは唐突過ぎて納得できないと思うから、ある程度説明をする。心して聞てくれ。」と龍牙は前置きをして龍牙はあぐらを掻いて座る。そして柔らかい口調で話し始めた。

「”レッドアイズ”を語るには、ある特殊能力を持つ一族について説明しなければならない。

彼らは特殊能力を持つ代わりに、とても短命な一族だった。

その寿命は早ければ30代の前半、どんなに長くても40前までだった。

それは”力の代償”だと彼らは諦めていた。しかし、彼らの中で、それに納得できなかった者が現れた。彼は非常に頭の良い人間だった。そして、自ら『なぜ自分たちが特別な能力を持ち、短命なのか』を科学的に解明しようとした。

長い研究の結果、遺伝子レベルで一般人とは異なる特殊な因子を発見した。そして、その因子を改良する事で、どんな病さえも治せる薬が作れる事が判明した。その時考え出された薬こそが後の”レッドアイズ”だ。正に夢のような薬だった・・・。コイツを少量入れれば末期癌さえも治せるのだから・・・。しかし、それは恐ろしい怪物を作る薬でもあった。

彼は『自分達を”異能者”と虐げてきた人々を見返し、短命で無くなる事が出来る』と喜んで、一族を救えるだけの治療薬を持って隠れ里に帰った。しかし、そこには何も無かった・・・。

焼け焦げた家の廃墟が広がっていた。一族は国家から危険とされ虐殺が行なわれ、隠れ里は焼かれていた・・・。彼は失望した。『自分は自分の一族だけでなく、病に苦しむ人々の為に懸命に研究し身を削りながら、早々に薬を届けられる事を、考えて来たというのに、こんな仕打ちがあっ

いいのか！』とその場で泣き叫んだ。そして、彼は変わってしまった。自分よりも苦しむ人の為に、全てを投げ出すような優しい彼は死んでしまった・・・。

そこに居たのは、憎しみのみで生きる夜叉だった。彼は自分が作ったとんでもない薬を使って全ての人間を滅ぼそうと考えた。彼はすでに薬の恐ろしい副作用を知っていたし、使い方を適切に行なえば問題ない事も知っていた。

だが、敢えて副作用の方を利用した。しかし、それには”レッドアイズ”の純度100%にする必要があった。でも、それは現在の科学でさえ不可能であるのに、70年以上も昔には可能性は0。それ以下だった…。しかし、そこは短命の原因を10代で発見した彼は発想を変えた。

『高める事が出来ないのなら、初めから純度100%の”レッドアイズ”を体内で作れる生物を生み出せばいい』と。そんな恐ろしい研究に興味を持った者が居た。それが世界を支配したいと思っていた闇の組織だった。その頃は世界が混沌としていた。

戦争に向けて歩き出していたのかもしれない。

彼は組織の力を利用する事にした。組織は彼の研究を利用とした。そして二つの考えは重なった。そして世界中から4人の天才達が集まった。彼らは核爆弾を発明したアイシュタインすら超える頭脳を持っていた。彼らにとって核など万民の過ぎた玩具としか思えなかった。彼らは人が越えてはいけない境界を越えてしまった。そして彼らは<ゴッドクリエイターズ>と呼ばれた。

彼らによって動き出したのが、<アーフィティシャル レッドアイズ プロジェクト>。

『レッドアイズを自らの体内で生成し、使いこなす究極生物を作り出す』という恐ろしい計画が動き出した。」と龍牙は顔の前で組んだ両手の間から深い悲しみを浮かべた顔を覗かせながら、少し間を置いてから再び続けた。

「ここまでの話で検討が付いてきたと思うが、そう俺こそがその恐ろしい計画から生まれた唯一の成功体であり、プロトタイプだ。そして彼の思惑通り世界に恐怖を与え、破壊を始めた。

しかし、その頃彼は、始めた当初のような憎しみは消え始めていた…。

研究が進むにつれ、彼は憎しみに駆られ大切な事を忘れていた事を思い出していった。そして、彼は『自分の一時の憎しみに怪物にたくない』と行動を始めた。それに賛同した者も多かった。それは何千という命を犠牲にして唯一成功した俺が、いとおしくなったのかもしれない。

彼は組織を抜け、死神と化した成功体を人間にしようと今度は”光の者”として新たな組織に所属し努力した。そして、唯一の成功体である俺、つまり禍悪主は一人の女と出会い、人間性を身に付けていった。後は前に話した通りだ。つまり、俺は遺伝操作から生まれた神の加護を受けぬ忌まわしきアーフィティシャルヒューマン、つまり”人造人間”というアニメだけにしか存在しないような有り得ない存在…。」と龍牙は苦しそうに言った。

「俺は化け物だ。そして君達のようなナチュラルな生まれがうらやしいとさえ思っている。

普通が一番だとね…。」と龍牙は涙を静かに流しながら、きなこ凱歌を見つめ言った。

「こんな事を言うのは酷だが、だからといって人を殺す事、罪を犯す事は許されない。だから龍牙、君はここに居る。逃げもせず、自分の宿命と戦い続けているのだらう？ そんな君をここに居る誰もが信じている。」と内村氏は優しく言った。

それに賛同する様に「生まれなんか関係無い。」ときなこは言い、

「そうですよ。大切なのは今ですよ。」と凱歌が言った。

彼らの言葉に龍牙は顔を上げた。そして、「ありがとう。」と呟き、泣きそうになった。

その時、プロフェッサーが口を開いた。

「わしがこの話の中で出てきた者じゃ。そしてお前に自分の憎しみを押し付けてしまった…。

何を言っても足りないが許してくれ。」と言うと龍牙の前にしゃがみ込んだ。

龍牙は「博士……。」と呟くとプロフェッサーの胸に顔を埋めて泣き始めた。

きなこと凱歌はそんな二人を見ながら、自分達がいかに幸せなのかを思い知った。
そして龍牙の『普通が一番』という言葉が強く心に突き刺さった。それは凱歌にとってはとても良く分かる思いだった。『こんな才能がなければ……』と思った事が何度もあったからだ。

～第48章～＜悪魔の頭脳＞

しばらくすると恥ずかしそうに龍牙が顔を上げた。その顔は涙でグチャグチャだった。

龍牙は慌てて顔を袖で拭きながら、立ち上がり全員に背を向けた。

「こんなの俺らしくない……。説明が途中だったんだが、この金属板みたいのが、俺の中で生成される”レッドアイズ”の量を制御している。

これのお陰で、俺は龍牙でいられる。でも、完全に”レッドアイズ”を俺から取ってしまうと俺は死ぬ……。皮肉だが、俺は”レッドアイズ”が体積の1%未満になると、貧血に近い状態になり、最悪の場合、臓器が正常に機能しなくなり死ぬ。俺は”レッドアイズ”なしでは生きられない……。

そして凱歌、君の体にも”レッドアイズ”に関わるものがあるようだ。」と言うと龍牙は凱歌の前に立ち、「ちょっと冷たいかもしれないが我慢してくれ。」と言い、注射器の中に残っていた”レッドアイズ”をそっと凱歌の左胸に垂らした。すると、今まで何も無かった皮膚に紅い印のような物が現れた。

その光景に全員が動揺した。それは凱歌も同じだった。

「これは……。こんなの知らないです。」と凱歌は動揺しながら言った。

その言葉に龍牙以外全員が動揺した。

「知らぬのも当然だ。これはつい最近入れられた物の様だ。そして、コイツは”レッドアイズ”のみ反応する隠し印だ。俺が気が付いたのは偶然だ。俺が禍悪主から戻った直後に凱歌に近づいた時に偶々滴れた”レッドアイズ”濃度が高い状態の血に、僅かにだが反応したような見えたからだ。

もしあったらと思って試したが、本当にあるとは……。」と龍牙も驚いている様だった。

そんな中で印を見た劉冥は驚き、腰を抜かしてしまった。その行動に全員が注目した。

「その模様は……。凱歌にあのチップを付け、俺に”言霊術”を教えた博士、羅聡様の左手の甲にあったのと同じです！」と動揺しながら劉冥は言った。

その言葉にすぐに龍牙とプロフェッサーは突如現れた凱歌の印を見直し、互いに顔見合わせ頷いた。

「アイツは本当に生きていたんだ……。」と龍牙は言った。

「可能性は十分にある。奴も我々と同じ方法を使えば……。そして、奴なら人を人と思わない行為をしてもおかしくない。」とプロフェッサーは真剣な眼差しで言った。

「これは計画を改めた方がいいな。奴は何を出してくるか分からないし、無関係な人間を巻き込む可能性も出てくる……。」と龍牙はプロフェッサーの肩に手を回し、凱歌から離れ、話を始めた。

その真剣な相談に全員が”羅聡”という人間に”恐れ”に似たものを感じた……。

～第49章～＜幸せな時＞

5分ほどしてプロフェッサーと龍牙が全員の輪の中に戻ってきた。

「これからの事についてだがまず、劉冥。君はこれから天山から取り調べを受けてもらう。

そこで知っている情報を全て教えてもらう。

次に凱歌。君には精密検査を再度受けてもらう。先の事もあるから。脳波検査をしてもらう。

そして、蒼凱ときなこさんには、八雲の家族を迎えに行ってもらいたい。

これらの事を明日までに行なってもらいたい。その後の事は後で指示する。いいかな？」と龍牙が言うと全員が了承した。全員が動き出そうとして時、パタッと倒れるような大きな音がした。全員が音のする方を見ると龍牙が倒れていた。

慌てて駆け寄ると、プロフェッサーが脈などを調べている内に「寝てる。」と呟いた。

全員が驚いていると、「栄養不足、つまりバッテリー切れで止まってしまったんじゃ。蒼凱運んでくれ。」とプロフェッサーが指示する。

「『レッドアイズ』というのはとんでもない量のエネルギーを消費して生成されるんじゃ。それは髪が紅い状態ならば常に作り続ける量が少ないが、通常の銀髪の状態から紅髪の状態になるのには体積の1%から80%台の濃度にする事を1度ならず2度も行なった。それ以外に注射器で2回も取り出している。紅髪になるだけで、成人男性が1日に消費する平均エネルギーほど必要なんじゃ……。倒れても当然じゃ。今は何をしても起きない。殴っても、蹴っても、骨折しても起きん。しかし、心配は要らん。単にエネルギーを補充すればいい。つまり点滴をすれば目を覚ます。さあ、皆は指示された事をするんじゃ。」とプロフェッサーが言った。

しばらくしてプロフェッサーと蒼凱が戻ってきた。

そして全員が龍牙が指示した事を開始した。

凱歌はプロフェッサーに連れられ、検査室でCTなど細かい検査を受けていた。

きなこは蒼凱の運転で、八雲の家族の泊まっている旅館に向かった。

- 夕方 -

蒼凱ときなこは八雲の家族を八雲の居る保護施設に連れて行き、施設に戻ってきた。

入り口で誰かが、出迎えていた。それは点滴を左手にした龍牙が右手で手を振っていた。

「お疲れさん。悪いな。いきなり倒れちまって……。俺も突然の事でよく分かってないんだけどな。」と龍牙は恥ずかしそうに頭を掻きながら言った。

「あれだけの事をしたんですから当然ですよ。」と蒼凱が言い、「龍牙さんだってたまには休まないとだめです！無理は良くないですよ！」ときなこがしっかりと声で言った。

その勢いに龍牙は「ごめん。」と謝ってしまった。その会話に蒼凱が笑い出してしまった。

それにつられて二人も笑ってしまった。

「そうそう。劉冥だが、ちゃんと支部の場所を言ってくれた。この事から更正プログラムを受けてくれる事になった。あとはマオについて調べるだけだ。コイツは明日の朝に調べてくる。

凱歌の方だが脳波検査以外は全部終わった。異常は無かった。今、カプセルで傷を治しているから、逢うのはもう少し待ってくれ。」と龍牙は歩きながら二人に説明した。

「龍牙さんは大丈夫なんですか？まだ点滴してますけど。」ときなこが心配そうに龍牙を見た。

「あっ。これはプロフェッサーがうるさいから仕方が無く付けてるんだ。これで3本目だからいい加減いいって言ったんだけど、血液検査だとまだ足りないって出たもんだからな。でも心配はないよ。

そろそろ夕食だ。今日はいい物が出ると思うぞ。なんか運難コンビが言っていたみたいだからな。」と龍牙はウキウキしながら言った。

『龍牙さん、本当に食べるのが好きなんだ。』ときなこは心の中で笑っていた。

ここでは、毎日食事は全員で摂っている事になっていたが、龍牙が食事の1時間前から落ちつかなくなるのである。

「じゃあ俺、凱歌を見てくるから、先に食堂に行ってくれ。」と龍冴はカプセル室に向かって歩いていた。

きなこは『私もついて行きます』と言いたかったが、蒼凱がきなこの肩をつかみ、首を横に振った。その理由は解らなかったが従う事にした。

「蒼凱さん。龍冴さんの事をどう思ってますか？」ときなこは訊いた。

「どうしてそんな事を訊くんさい？」と蒼凱は微笑みながら訊き返した。

「あんな話を聞いて、私…。」ときなこが言葉に詰ると、蒼凱は「確かにね。あんな事を聞いてすぐに、理解できるものじゃない。でも、僕達は今まで共に力を合わせてきたし、この世の中の裏側を沢山見てきた。だからかもしれないけど、僕はあっても不思議じゃないなと思ったんだ。

でも、龍冴が人間じゃなくても、仲間に変わり無いし、何かあったら助けられるのは龍冴の苦悩を知る僕達だけなんだよ。第一、そんな事で僕達の関係、仲は変わらない。

きなこさんだって、凱歌が人間じゃなかったとしても悩んでいたら、助けが必要だったら助けるだろう？」と笑って答えた。

「そうですね。それを知ったからって龍冴さんが変わる訳じゃないんですから。考えるだけ無駄だったかも。」ときなこも笑った。

「何話してるんですか？あんまり仲良くしてると凱歌がやきもち焼いちゃいますよ。」

と天山が入って来た。

「別に何でも無いですよ。第一、やきもち焼くほど二人の仲には入れませんよ。こっちが火傷しちゃうですよ。」と蒼凱が笑いながら言った。

「からかわないで下さい！」ときなこは顔を赤くして早足で行ってしまった。

蒼凱と天山は顔を見合わせ、微笑んだ。

- カプセル室 -

プロフェッサーが凱歌の入っているカプセルを眺めていた。

そこへ龍冴が点滴をぶら下げる器具を押しながら入ってきた。

「どうだ、凱歌は？」と龍冴が訊くと、「もう少し時間が掛かる。お前の点滴が終わる頃には終わる。」

とプロフェッサーが答えた。

「そうか…。これが終わるくらいか。じゃあ俺がここで終わるの待ってるから、出かけてもいいぞ。」

と龍冴が言った。

「出かけると言っても用なんか無いからな…。しかしお前、皆を危険さらした事で、落ちこんどるのではないか？」とプロフェッサーが心配そうに言った。龍冴は黙って凱歌を見ていた。

「やっぱりそうか…。しかし、起きてしまった事を悔いても仕方がない。悔いるのなら先に進むんじゃ。分かったな？」とプロフェッサーはしっかりと声で言った。

「分かってる。ここで立ち止まる訳にはいかない。ましてや、奴が前に立ちはだかるなら尚さらだ。」と龍冴は影を持つ声で言った。

『相当効いとるな…。こいつは何とかしないとまずいな…。』と寝ている凱歌を、暗い表情で見ている龍冴の背中を見ながらプロフェッサーは思った。

- 30分後 -

龍冴の点滴が終わり、片づけをしているとカプセルの終了音が鳴った。

プロフェッサーはテキパキと操作し、凱歌を起こした。
凱歌は寝ぼけたような顔をして床に降り立った。
龍冴はそんな寝ぼけ眼の凱歌に「おはよう。」と明るく言った。
それに凱歌が「あっ。おはようございます。」と慌てて返事した。
「龍冴さん。もう大丈夫なんですか？」と凱歌は段々と目が覚めてくる内に思い出した様に言った。
「ああ。もう大丈夫だ。単にエネルギーが切れたただだからな。点滴3本もしたからな。ホント、俺って人間ってよりも機械みたいだな。」と笑って言った。
その言葉にプロフェッサーと凱歌は複雑な気持ちになった。
「何暗い顔をしてんだよ！別に今言った事は気にしてないぞ。第一、例えだろ例え。全く！冗談が効かない奴だな。さあ、皆がお腹を空かして待ってるぞ。」と龍冴は笑顔で言い部屋を出て行こうとしていた。
「待ってくださいよ。」と凱歌は龍冴を追いかけた。
プロフェッサーはそんな光景を見て微笑みながらゆっくりと歩き出した。

- 食堂 -

ここでは多くの人が食事が出来る様になっているが、ここには10人ぐらいで食事の出来る個室のような部屋が数カ所ある。その1つにきなこ達は居た。

きなこはあまりにも遅いのでイライラしていた。

天山と蒼凱はイライラを解消する為にと、きなこにビールを進めた。きなこは初めこそ断っていたが、我慢しきれなくなり飲み始めた。そんな時遅くなった龍冴が凱歌を連れて入って来た。

「ホイさん遅かったじゃない！さあさあ食べよう。」ときなこは凱歌を自分の隣に座らせながら言った。その場に居た者はその積極的なきなこに、ただただ驚いていた。そんな時、龍冴だけが離れたテーブルに座った。

「どうして龍冴さんだけ離れて座るんですか！一緒に食べましょうよ！」ときなこが訊いた。

「えっと…。食べる量が違うからね。食べたらずくに行きますから。」と龍冴は両手に箸を持って言った。凱歌ときなこが不思議そうに首を傾げていると、龍冴は器用に両手の箸を使って目の前に置かれた大量の料理を、パクパクと食べ始めた。

その行動に二人とも驚いていたが、他の三人は見慣れた感じで気にもせず話をしながら食事をしていた。

「気にせんでいいぞ。エネルギーが足りないから沢山食べんといかんからな。食べ始めると周りの者の分をまで食べてしまうんだ。それにたまにしとる事だからのう。」と気にもせずプロフェッサーが説明した。しかし、その説明を受けても龍冴の人並み外れた食べ方、スピード、量に目を見張った。

龍冴は二人の視線を気にもせず5人のテーブルに用意されている量とほとんど同じ料理を黙々と食べた。しかも食事が始まって5分も経たない内にほとんど食べてしまった。

凱歌ときなこはその頃には気にするのをやめていた。しばらくすると龍冴が5人のテーブルに入ってきた。

「やっぱり一人で食べても面白くないな～。さあ、盛り上がりよう！」と龍冴は皆を盛り上げていた。

しかし、きなこに無理矢理ビールを進められ、勢いで飲んだ。その瞬間、龍冴は目を回してしまった。

きなこは仰天して龍冴を揺すっていると、べろべろになったプロフェッサーが簡単に言った。

「飲んでしまったか…。こいつはな。酒を飲んだ事がほとんどないからアルコールに異常に

弱いんじゃないよ。」とプロフェッサーが言った。

「全く。龍冴もどうして飲んじゃうかな？時間が経たないと起きないな、これ。」と天山が瞳孔確認をしながら言った。

「そういえば凱歌はどうしてお酒飲まないんですか？スナイパーとしての習慣みたいなものですか？」と蒼凱が訊いた。凱歌が答える前にお酒で饒舌になっていたきなこが言った。

「違うんです。単に龍冴さんと同じでお酒がダメなんです。でも、私は飲める様にしますから！」と明るくきなこが言った。凱歌がきなこが理由を言ってしまう、黙ってオレンジジュースを飲んでいて、きなこにビールを無理矢理飲まされてしまった。

凱歌も意識を失ってしまったが、きなこに叩き起こされては飲むという事を、お開きになるまで繰り返す事になってしまった…。その途中で龍冴が目覚めると、凱歌と一緒にきなこことプロフェッサーの”指導”を受ける事になってしまった…。

蒼凱と天山はきなこ以上の酒豪だったので、きなこが酔いつぶれてしまう寸前でお開きにして、全員を部屋へ連れて行くなどの、後片付けをしていた。

「しかし、あの二人が組むと大変だな…。」と天山が蒼凱に言った。

「あの二人って、きなこさんとプロフェッサーの事ですか？確かにあの二人はお酒を楽しんでますが飲まれちゃいますからね。」と蒼凱が楽しそうに言った。

「それも凱歌と龍冴という玩具を見つけちゃったから、なおさらですね。あのままだと明日、龍冴は別としても三人共二日酔いになりますから、予防策をしておいた方がいいと思うんですが…。」と蒼凱が心配そうに言った。

「そうだな…。凱歌はお酒に対する抵抗力が特になから、凱歌には二日酔い予防剤を打っておこう。きなこさんとプロフェッサーには飲み過ぎの罰を受けてもらいましょう。」と天山は言う、凱歌の部屋へと薬を運びに向かった。

蒼凱は天山が食堂を出るのを見送ってから、静かに食堂を出てミーティングルームで一日の報告書の作成を始めた。

その表情は徹夜での仕事でありながら、楽しい出来事を思い出して笑っていた。

しかし、明日から過酷な試練の日々が待っているのを、この時知る者は誰も居なかった…。

- 続く

【あとがき】

今回、前回の話を読んで頂いて、「ん？」と思われた方も居られると思います。

実は、刺青・焼印についてですが、このアイデアは恋人はスキップさんの作品と類似しております。けれども、これは作品を書き始めました当初から考えていたものでして、出てくるタイミングが偶然にも恋人はスキップさんの作品と同じ時期になってしまいました。

私も書きながら「これは…。」と思ったのですが、ここで出しておかないと後の展開上、どうしてもはずせない設定なので、やむを得ず出しました。

誤解を招くような事をしてしまいまして、すいませんでした。なにとぞご了承の程を。